

1998/4/12 和敬塾平成10年度入塾式

「脳と現代社会」 解剖学者 北里大学教授 養老 孟司 先生

おはようございます。控室で待っておりましたら、みなさんの大変元気のいい声が聞こえてきました。今度は壇上に私のような元気がない者が出てきて申し訳ありません。

私は去年で還暦になりました。巨人の長嶋監督が還暦になった時に「初めての還暦です。」と言ったので「あの人は2回、還暦をやるつもりかなあ。」と思いました。2回目の還暦を迎えるとすれば120歳になっているはずですから、長嶋さんはそこまで生きるつもりなのでしょう（笑い）。

今回『脳と現代社会』という題をつけたのは、これからの時代に、ものを考えるうえでどのようにしていけばよいだろうか、ということをお話しするためです。

解剖とは

私は昨年12月に大学院ができた北里大学で、『医療人間科学』という科目を作って講義しようとしています。お医者さんに「医学とは何か」というアンケートをとりますと、9割の方が「医学は自然科学だ」と答えるわけです。しかし患者さんは自然科学者に診てもらおうと思って病院に行っているわけではないでしょう。それでは「医学の基礎になる学問は一体何だろうか？」ということを考えるのが、医療人間科学です。

実は私は解剖を長年やっております。皆さんは解剖というと特別なこととお考えでしょうけれども、解剖というのは、只今述べたようなことを考えさせる学問です。その理由をご説明いたします。

解剖では死体があり、それを自分の手でバラすんですけれども、初めは緊張していますから他のことは考えない。しかし10年、20年とやっていると、だんだん変なことを考えるようになります。まず最初に自分が見ている、この亡くなった人って何だろう、ということをお考えははじめます。意識的に考えるわけではないんですが、10年経つと、どうしても、どこかで考えている。やがて、だんだんと答えが出てきます。亡くなった人というのは、最終的には自分自身であるということに気がつきます。つまり「私もいずれこうなる」ということです。

皆さんの年齢で解剖をやりますと、亡くなった人は赤の他人、なんか変なもの、自分とは全然違うもの、というふうにお考えになるでしょう。亡くなった人は自分とは全然違う変なものだ、という印象は、実際には世間の9割以上の人が持っているのではないのでしょうか。もし皆さんの中に神戸の震災を経験した方がいれば、そうではないと思うかもしれませんが、現代の日本では亡くなった人は特別なものです。けれどもよく考えてみますと、いずれ誰でも死体になるわけですから、そうすると、それは「自分だ。」という結論が出てきま

す。いずれ自分なるものだ、という意味で自分である。しかし亡くなった人に触るとか、親しくする - 添い寝しろとはいいませんが - ということは何か非常に不気味である、とこれも恐らく9割9分の人がお考えでしょう。そこではっきり出てくるのが一つあって、もし自分が死ぬ、死ぬと死体になる。しかし、その死体は他人であり、不気味である。これは我々自身がある性質を抱えていて、その性質と自分の考えていることの間には折り合いがついていない、ということの意味します。お分かりでしょうか。自分だって必ず死んで死体になるんだけど、人の死体を見た瞬間に「気持ちが悪い。」と言って逃げるのが普通ですから、それは、自分が持っている要素の中で自分が受け入れられないものがある、ということの意味します。

脳と意識

私が『脳と現代社会』という題をつけました基本には、その事があります。この場合「脳」というのは「意識」のことでございますけれども、意識は自分自身の一部を否定するわけです。それが死体の「気持ち悪さ」であります。なぜならば、死というのはどういうものか分からないし、死んだという状態がどういう状態かも理解できない。つまり自分の死というのは、意識にとって最も矛盾した状態です。ですから皆さんは死体というと、その辺に客観的にあるもの、「モノ」「ブツ」だと思っておられるでしょう。しかし、死体が気持ち悪いというのは、すでにモノだと思っていない証拠なんですね。普通のモノだったら、気持ち悪くはないのですから。よく私が言われたのは「先生なんか、人間がモノに見えるでしょう。」ということでしたが、いつも「私はモノに見えたことはありません。」と答えております。

気持ち悪いと思って見れば、必ずそう見えるものです。例えば、解剖教室に、亡くなった方がお棺に入って運ばれて来ます。それを我々が出します。死んだ人は重たいので、職業病として我々のところにはギックリ腰の人が多いです。そして台の上に置いて処置をしなければなりません。まず防腐剤を注入します。その時に、どうしても顔を見るわけです。そういう方は、大体が初対面ですから、顔が合った時やっぱりどうしても挨拶をせざるを得ないという気持ちになります。ですから一応、目礼をいたします。相手が挨拶をしたら大変ですよ、これは（笑）。もしそうなったら、大急ぎで逃げようと思っておりました。私は37年間、解剖をやっておりましたが、1度もそういう経験をしないうちに辞めることができ幸いでした。

そういうふうに考えますと、死体といえども相手は人です。どこまでいっても人ですが、恐らく皆さんはそうお考えではなかったのではないのでしょうか。その人のある要素が、死体としてそこに出てくる。そうすると我々は気持ち悪いといって否定する。極端な人は「そんなもの見るもんじゃない。」と言います。「それは一体どういうことなのだ？ 何で自分自身であるはずのものが嫌なのか。」ということをお聞きしたいのです。現代社会というのは、このような傾向が非常に強くなってきている社会です。自分自身の持っているある要素

を、徹底的に切り落としていった社会が現代社会である。では、どういう要素を切り落としたのか。私の講義で学生さんから質問を受けるときに、よく言われる言葉があります。それはなにか。「説明してください。」という言葉です。「説明してください。」ということの大前提には、説明されたら分かるという前提があります。それならば「説明されたら、本当に分かるのか。」と私は逆に質問したい。

このことは癌の告知に典型的に出てきました。「自分が癌になったら言ってくれ。」という人もいるし「言わないでくれ。」という人もいるでしょう。癌告知の是非についての議論がございしますが、「その議論は意味がない。」と私は言っております。皆さんは恐らく癌ではないでしょう。ですから「あなたは癌で、寿命は大体あと6ヵ月ですよ。」と言われた時の気持ちを想像することはできても、実際に言われることはないわけです。しかし、その時に自分が実際にどう考えるかは、実は言われてみないと分かりません。言われてみないと分からないことを議論してみても始まらないでしょう。ですから、それについていかに説明を加えても駄目です。1番簡単な例としてよく申し上げるんですが、私は女の人に「お産する気持ちはどうですか。」と訊きません。訊いたって仕方がないのです。私にはお産が出来ないので。その気持ちがどうであるかは本人でなければ分からない。そういった部分は、現代社会ではある意味で非常に抜け落ちてきています。それが、現代社会がバーチャルだという意味です。

例えば、死というものが、どのくらい身近なところから無くなってきたか。家庭の日常生活の中で家族が亡くなった方が、この中にどの位いるでしょうか。私はよく「死んだ人を見たことがあるか。」と手を挙げてもらうんですけども、恐らくそういうものを目にしない社会が出来てきています。これは統計から分かります。今から50年ぐらい前、戦後すぐの時代には、7割以上の方が自宅で死んでおりました。今では死ぬ人はほとんど病院で死にます。都内では9割以上の方が病院で死んでおられます。そうすると日常生活の中に死がありませんから、死というのは病院で起こる特別な出来事だ、と皆さんはどこかで思っているんじゃないでしょうか。そこで当然出てくるもう一つの疑問は、戦後50年の間に、なぜ自宅ではなくて病院で人が死ぬようになったかということです。君らの常識では恐らくそれが当たり前でしょう。なぜなら「うちは2DKで狭いし、そんなところに死人が寝ていたら、場所が足りない。」と。実際に私は「母親が亡くなったから、すぐ引取りに来てくれ。」と言われたことがあります。その理由は「置いておくと、狭くて場所がない。」あるいは「死にそんな病人が家にいたのでは、仕事にならない。」「家では十分な医療ができない。」と言うかもしれません。しかし根本の理由はそうではなくて、皆さんが死体を見た時に「そんなもの見るものではない。」という気持ちと同じではないか、と私は思います。つまり、人が死んでいくところは普通の状況ではないから、それは外へ出そう、日常生活からは外そう、特別な出来事にしよう、ということではないかと思えます。

そういうかたちで、死ぬところは家から外しましたが、死ぬところの対局、人生の別の端は生まれるところですよ。生まれるところも現在ではほとんど全部病院に入りました。昔はお産婆さんを頼んで、家の中で子供が生まれていたわけです。私はつい2、3年前に大阪へ行き、保健婦さんの会で今のような話をしました。会が終わってパーティーになりました。何人かの方と食事をしたんですが、その中に丈夫な方がおられまして、その方が「先生、私はこの間、4人目の子供を家で産んだんですよ。」と言いました。子供を家で産むには、産婆さんを頼まなければなりません。その人は大阪の人でしたが、産婆さんを探してもなかなかいない。結局、探し出したのは2万人取り上げたという80過ぎのお婆さんだった。その人に頼んで無事に家でお産をしたそうです。お産が済んで、産婆さんの方をふと見たら、胎盤、いわゆる後産ですね、それを押し載っている。「何をしているんですか。」と聞いたら「奥さん、この胎盤は匂いがいいですよ。これ食べられますよ。」と言うので、「私は食べちゃいました。」と言っていました。さらに付け加えて、その産婆さんが「今の胎盤は匂いが悪くて食べられないのが多いんです。」と言ったということです。

生老病死と現代社会

何かとんでもない話をしていると思うかもしれませんが、つまりお産というのはそういうものだったんです。けれども、それを現在では病院に入れてしまいました。生まれるところから死ぬところ、その中間に何かあるかということ、年を取るところ。最初に私は去年還暦だったと言いましたが、自分が還暦になるなんて夢にも思っていなかったんですけれども、いつの間にかその年齢になった。生まれるところ、年を取るところ、病気になるところ、死ぬところ、これを「生老病死」といいますが、全部異常な出来事だという気持ちが、皆さんにはあるのではないのでしょうか。しかし、それは全部皆さんの人生であります。すなわち、皆さんもどこかで生まれたはずであって、そして今、毎日生きているだけで年を取っていきます。これを昔は「いたずらに馬齢を重ねる。」と言いました。そして、どこかで病気になって、必ず死にます。間違いなくどこかで死ぬ、ということだけは予言できます。では、それはどこへ行ったか。

現代社会というのは、そういうものがどんどん消えていく社会であります。私は数年前に新聞を読んで非常に驚いたことがあります。体育祭が嫌いな子が「体育祭をやるんなら、自殺してやる。」という手紙を教育委員会によこしたという事件が新聞に報道された時です。どうして驚いたかといいますと、これは天才的だと私には思えたわけです。どこが天才的か。まず、自分の死というものを切り出して、お金のようには考え、それと体育祭という授業を交換するという、この発想です。これは徹底的に抽象的で、かつ経済的な発想であります。この場合には、自分の死がお金になっていて、そのお金で体育祭を買うとっているわけです。その裏には、もちろんそれはやらせないという含みがあるわけですが、自分の死というものを取り出して、ここまで抽象化して使える子供がいるということは、私にとっては大変な驚きでした。それは別なことを

説明しないと諸君には分からないかもしれません。なぜなら私にとって家族の死 - 父親の死、つい3年前に死んだ母親の死 - これは全て自宅で起こったことだからです。自宅で起こった死を抽象的に切り出して、お金のように考えて、それを何かと交換するという発想は全くありませんでした。父親の死も母親の死も、それはそれで独立した完全な出来事でございます。そういうものを消していった社会がどういう社会になるか。それは諸君がこれから住もうとしている社会であります。その社会を私は『脳化社会』、「脳」が「化けた」社会と呼んでおります。もう少し具体的にいうならば、それは「街」や「都市」です。

和敬塾におられる方は、それぞれ故郷あるいは田舎があるかもしれませんが、現在、本当に日本に「田舎」があるかということをもまず質問したい。私は鎌倉で育ちまして、今でも鎌倉に住んでおります。私は昭和12年に生まれて、小学校の2年生 - 8歳の時ですね - 昭和20年に戦争が終わっております。その頃の鎌倉をよく覚えておりますけれども、まず車がありません。あったのは木炭バスで、これは坂道を登るとエンコしますので、お客さんがバスを降りて後ろを押したりしていました。大体、木炭でバスが動くということは考えられないでしょうが、薪を焚いて走っていました。せいぜい車といえばそのくらいで、あとは牛と馬、そしてリヤカーです。そういう世界が私の考える田舎ですから、それをいま探そうとすると、どの辺にあるのか。数年前にNHKの仕事でブータンに参りましたが、ブータンは典型的な「田舎」でした。まだ車はほとんど使われておらず、牛と馬がおりまして、完全な田舎でございます。お金があっても仕方がありません。なぜかという、店がありません。店がないから、金の使いようがない。そういう場所は諸君の頭の中では恐らく「遅れたところ」というふうに位置付けられるんじゃないかと思えます。そういう遅れた世界でありました日本が、この50年間で急速に現在のようになったのです。その間に、皆さんが要求されてきたことは、できるだけ早く大人になれ、ということではなかったかと私は思っています。

大学紛争

私が大学に入って一番印象的だった出来事は大学紛争なんですね。『東大紛争』という名前は聞いたことがあるかも知れません。私は大学で助手になり、29歳の年に初めて給料をもらいました。実はその年に始まった出来事です。その時に1番印象が深かったことがあります。学生が何班かに分かれてケンカをしているわけです。終いにはホースを持ち出して、相手方に水をかけたり、下に敷いてある石を割って投げたりしてました。割るのは女子学生の役目で、道路の石をひっくり返して、平たい石を割るのです。それを投げるのは男の子の役目でした。それを見ていて「ああ、こいつらは小学生の時にこういうケンカをさせてもらったことがないんだなあ。」とつくづく思いました。それが私どもには、その当時の学生の幼さに見えたわけでありまして。しかし、その後を見ていると、非常に複雑だということが分かってきました。

現在、中学生が先生を刺したり、小学校では学級崩壊と呼ばれる現象が起っています。大学紛争は今からもう30年前のことですが、30年前に大学生がやっていたことを、今、中学生や小学生がやっているんだなあ、と私は思います。つまり、ずっと年齢が若くなっていったということが分かります。ということは、恐らく非常に早く諸君は育ったんじゃないか。つまり子供の時代がなくて非常に早く大人になっていったのではないか。ですから我々が子供の頃に子供としてやっていたことを、やらずに大人になった人が非常に多いのではないかという気がします。急速に大人にならなければならない社会ですから、置いてきた部分があるわけです。

大学紛争の頃には、その置いてきた部分は石を投げたりゲバ棒を持って振り回したりするところに出ておりましたけれども、現在ではそれから30年経っています。ここまで来ると、もう何を攻撃しているのか分からない状況になってきているのではないかという気すらします。子供が子供らしい生活を与えられないで急速に大人になっていく。それが偏差値に代表される『受験戦争』と呼ばれるものだと思っています。それは大人の作ったシステムで、子供たちが相談をして学校のシステムを作ったわけではありません。そのシステムに入るために非常に時間を使うということは、諸君が非常に長い間、大人の世界に適応させられてきたということだと思っています。それは子供の時期がどんどんなくなってきたということで、私から見ると、皆さんは、ある点では私が子供だった頃に比べると非常に大人であるという気がします。

大人とは

では、現代社会において大人であるということは、どういうことか。まず第1に、他人のことをよく考えるということです。他人に迷惑をかけない。今の若い人を見て一番気がつくことは、他人を傷つけることを嫌うことです。それは裏を返せば、他人に傷つけられることを嫌うということです。傷つけることを嫌い、傷つけられることを嫌いますから、どちらも得意でない人は『オタク』になります。オタクは他人に対して距離をとる人が多いようです。つまり「おまえ」とか「おい」ではなく「オタク」と呼びかけるわけです。それは他人に対して、できるだけ距離を遠くするということです。そうすれば傷つけられないし、傷つけません。私の子供たちは皆さんよりもう少し年上ですから、よく分かるような気がするんですが、うちの子供たちが、私たち親に対して言うことがあります。「うちの親は人を傷つけることを平気で言う。」と。こちらは、そんなことは当たり前だろうと思って言っているんです。

二つの世界

現在の価値観は、人間関係をものすごく大きいものとしてとらえている。しかしそこで人間関係が上手くできなくて破綻を起こす人が必ずいるんですね。それがいじめられる人です。皆さんも記憶があると思います。私の時代にもいじめられる人は必ずいました。ただ、ウエイトが違うんです。

私は二つの世界があるという話しをよくします。一つは「人間関係の世界」で、もう一つの人間関係と関係のない世界は「自然」でございます。今、私がお話しているこの壇上には、自然がほとんどありません。例えば、ここに松の盆栽が飾ってあります。これは人間が作ったものではないから「自然」かという、この盆栽は、ここに生えたくて生えているわけではないでしょう。こんな格好で生えたくて生えているわけではなくて、人間がこのように作っているということはお分りでしょう。ですからこの場所に置かれているものは全部、何らかの意味で人間が意識的に考えて、作って、置いたものです。都会とは、それだけで出来ている世界です。

そこで厄介なものが一つだけ残っておりまして、それが最初に私が話を始めた人間の体なんです。人間の体は意識して作っておりませんので、どうも具合の悪いところがあります。何のために目玉が2個なければいけないのか、3個のほうが便利じゃないか。指はなぜ5本じゃなきゃいけないか。3本でも4本でもいいんじゃないか、あるいは6本あったらもうちょっと便利じゃないかとか、そういうことが言えない世界が人の体です。それは我々の体が「自然」だからです。皆さんは自分の体が自然だということを意識したことがないかもしれません。一方、都会は「全てのものを人間が意識して作ったもので置き換えていくところ。」と定義することができます。

例えば東京の町が、なぜ完全に舗装されるかということ、地面は人間が作ったものではありません。泥も人間が作ったものではありません。それは嫌だからコンクリートで埋めるということです。ですから舗装は理由の如何に関わらず、徹底的に進行いたします。東京の町の中をお考えになって下さい。1番東京らしい、都会らしいと考えられるところは新宿の高層ビル、あるいはお台場の近辺、有明の辺り、天王州。そういうところに若い人が集まりますが、それは誰かが設計して作った場所でございます。ですから、それは作った人の頭の中だと言ってもいいわけです。それが『現代社会と脳』ということの意味です。君らは何らかの意味で、人の頭の中に生きている。そこで非常に重要になってくるのが人間関係だということは、もうお分かりだと思います。

それとは違う世界がもう一つあって、それが「自然」と呼ばれる世界です。自然というのは、私は「人の意識が作らなかつた」と定義します。そうしますと、直ちにそれに当てはまるものが都会の中に一つだけ残るということが分かります。それが、皆さんの「体」です。都会化しますと、体はどんどん隠されます。いろいろな意味で隠されて、無くなっていきます。それが、先ほど申し上げた、生まれるところ、年を取るところ、病気になるところ、死ぬところが現代社会から隠れていった理由です。

さらに直接的な体も隠れていきます。

私の体が「自然」であって、私が作ったものではないということを説明するために1番いい方法を考えたことがあります。それは、本日お話をするために先ほどから控え室で待っていたわけですが、控え室で服を脱いでくれば良い訳です。真っ裸でここに出て来ようとする、当然のことですが途中で捕まって

しまいます。皆さんに伺いたいのは、その理由を考えたことがあるか、ということ。私がここに裸で立っているということを考えてみて下さい。どこに毛が生えていようが、私のせいではありません。私がそこに毛を生やしたくて生やしたわけじゃない。どんな格好をしていようが、それは本来、私が決めたことじゃないんですから、その形は私の責任ではありません。それを見せたということで、なぜ私が責任をとらなければならないのかということ。ということです。

私が子供であった頃の話をちょっといたしましたけれども、その頃、禪一丁で外で働いている人がたくさんいたんですよ。電車の中では、お母さんが赤ん坊によくお乳を飲ませていました。今や、そういう風景は全く見ません。ここにいる皆さんもちゃんと服を着ておられます。「当たり前だろう。」と言うかもしれませんけれども、それが当たり前になったのは、いつ、どこからか、ということ。ということです。

例えば、文化人類学に興味のある人ならば、地球上にはほとんど完全に裸で暮らしている社会があることもご存じでしょう。そういう社会を、私が現代社会と呼んだ都市社会の人はどう呼ぶかということ、野蛮な社会、原始的な社会と呼びます。しかし野蛮だろうが、原始的だろうが、皆さんの体はさっき言ったように初めからあって、それがあつた形をしていることも事実であり、それが皆さん自身の責任でないことも確かです。勝手にそうになっているんですから、その形に「責任を取れ。」と言っても無理です。そこで、どういうことが現代社会の中で起こってくるかということ、「自分が作らなかったもの、人の意識が作らなかったもの」は徹底的に隠すということ。ただ隠すのでは隠しきれませんから、本日のように人前でお話しするときには、私も一応ネクタイを締めてワイシャツを着て、ダークな色のスーツを着て出てまいります。別な機会には別な服装をいたします。これをTPOと言っておりますけれども、これは自分の体があたかも取り替えがきくんだということをお互いに見せ合っている、だまし合っていると言ってもいい。床屋へ行かなきゃいけない、ひげを剃らなきゃいけない、これはみんな同じ理由です。身体は放っておきますと自然の正体を表してまいりますから。それは現代社会、都市の中では許されません。

都市と平和

このようにして、我々はそういうものをどんどん伏せてまいりました。そして皆さんのような若い人にとって一番問題になる点は何か。二つあります。それは性と暴力であります。性の問題と暴力の問題とは、都市社会の中で身体が表してくる二つの重要な自然の問題なのです。都市社会では、まず暴力の方は徹底的に禁止されます。これが許されている職業が二つありまして、警官と軍隊であります。両方とも本来は徹底的に制服を着るのです。これには意味があります。つまり、外に出た時に泥棒と私服刑事が取り組み合いをしていますと、どっちが泥棒でどっちが刑事か分かりません。軍隊ではご存じのように軍服を着ない私服の兵隊はゲリラと見なされて、直ちに処刑されても文句が言えません。正規の軍服を着ている軍人は国際的な条約によって保護されておしま

す。そういう意味で制服は保証する装置であります。そして、昔は学生が制服を着ていたのもちょっと似た理由がありました。その理由はご自分で考えてみてください。

そういう形で文明社会は、暴力をまず徹底的に統御します。戦後の日本の歴史は都市化の歴史であって、都市化にとって最も重要なものは、平和でございます。諸君は日本の戦後の平和主義の中で育ってきておりますから、都市化がこういう根拠を持っていたということはお気付きではないかもしれませんが。

都市は、平和がなければ成り立たない場所です。ヨーロッパにプラハという町がありまして、プラハは中部ヨーロッパのど真ん中にある都市です。いろいろな民族があそこを通り抜けて行ったわけですから、本当は絶えず戦乱にあう場所のはずです。しかしプラハの町に行きますと12世紀からの建物が未だに残っています。なぜそういうことが可能だったかということ、プラハは戦争があるたびに必ず中立の立場をとりました。都市に絶対に平和が必要だ、ということをやヨーロッパでは『都市の平和』と特別な用語を使って言うぐらいです。君らは、日本が平和憲法をもっているから平和だと思うかもしれませんが、私はそう思っておりません。戦後の日本が徹底的に都市化していくために必要であったことが、平和だったと思います。ですから、それは理念というよりは、実際上の必要でもあった。

江戸時代は大変平和な時代でした。そういう時代に暴力がどのくらい規制されていたかということは、『忠臣蔵』という日本人の好きな物語をご覧になれば分かります。討ち入りのところだけを外人に見せると、いかに暴力が好きな国民かというふうに見えるかもしれませんが、そもそもあの事件の最初の原因になったことをお考えください。殿中松の廊下で浅野内匠頭が脇差を抜いて、吉良上野介に切りつけたことが原因であります。当時、侍であるにもかかわらず、江戸城に登城する大名は、二本差のうち大刀は必ず入口で預けなければなりませんでした。丸腰では様にならないから、脇差の帯刀だけは許された。しかし、その脇差を鞘走ったら切腹であります。そのくらい暴力は江戸の城内で厳しく統制されておりました。江戸がいかに平和的な都市であるか、それだけでもお分かりになるとと思います。都市は、本来そうやって暴力を規制するところでした。

性の問題が全く同じで、江戸の場合には、ある特定の地域に囲い込まれておりました。それが吉原であります。性の問題は、人間の身体が必然的に作ってしまう性格のものです。生まれて、年を取って、病を得て死ぬ、と先ほど言いましたが、それと似た問題です。これも都市化しますと、非常に扱いに困ってまいります。江戸では特定の場所に閉じこめるという形で、空間的に囲い込みました。

食事の問題も典型的で、12時になったら、みんなが一斉に腹がすくというわけではないですけれども、特定の時間に特定の場所であるのが食事だということはお分かりだと思います。また何故、物を食べながら道を歩くと、どこの国でも行儀が悪いかという理由は、基本的に身体の統制と関係があると私は考え

ております。

このように、どんどん私どもの社会は脳の方に寄って、身体の方を統制してまいりました。諸君はそうやって出来上がってきた社会の頂点にいると私は思っています。冒頭で皆さんは元気がいいと申しましたけれども、運動部型のある種の身体的な感覚が今の若い人はかなり弱くなってきた。だから逆に、それをさまざまな社会的な形でもう1度作り直しています。それがこのあいだの長野オリンピックに非常にきれいに出来上がりました。オリンピックでは、非常に元気が良くて成績が良かったですね。あそこに出ていた若い人たちは君たちの理想の姿に近いんじゃないでしょうか。その前にありましたのが、貴乃花、若乃花、イチローの世界であります。そういうものが、現在の都市化の中で若い人が表してきている新体制であると思っております。そういう世界に乗りそびれた人たちがいろいろな問題を起こしているわけです。

人間の作った世界と自然の世界

先ほど言いかけて話がちょっと横へずれましたが、人間の作った世界が都市であり、それに対して人の作らなかった世界があるという話をしました。私が子供だった頃の世界は、全く完全にその二つからできておりました。一つは先生がいて、学校があって、家族がいてという「人間関係の世界」。もう一つが、魚を捕ったり虫を採ったりする時は山へ登ったり川を歩いたりするわけですが、そういう「自然の世界」とに分かれておりました。その二つが均等の重みを持っておりました。いじめの問題は人間関係ですから、それは私の世界では、その半分に属する出来事であったわけです。しかし恐らく君らが育ってきた世界の中では、人間関係が9割ないし10割を占めていたに違いないので、そういう世界を考えると、いじめの重みは2倍になります。なぜなら、それに関わりのないもう一つの世界がなかったからです。皆さん自身は子供の時からその世界で大きくなってきたわけですから、そういう意識はないかもしれませんが。

公立学校の先生方の初任者 - つまり4月に先生になったばかりの方ですね - が夏休みに船に乗って日本一周をするという、文部省がやっている研修旅行があります。私もその船と一緒に乗ったことがあります。そういう先生方と一緒に暮らしていると、非常によく分かることが一つあって、それは先生方の話題が全て広い意味での人間関係だということです。例えば落ちこぼれのいないクラス、あるいはみんなが楽しい仲良くできるクラスを作ろうという話を真面目にやっています。そんなことは皆さんも学校でよく聞いたのではないのでしょうか。船に乗って十日ぐらいで日本一周するのですが、ある時、乗っている先生に「先生、私は忙しくて、海を見てる暇もないんですよ。」と言われました。船に乗っているのにですよ。そういう方に、私は一つだけアドバイスをします。「1日に5分でいいから、人間と一切関係のないものを見てください。」と。そう言われた時に、諸君は何を思い出しますか？

私は鎌倉に住んでいますから、海岸に行って海の波を見ています。あれは人

間と何の関係もありません。勝手に寄せては返しています。そんなものを見ても1文にもなりません。しかし「そんなものを見てどうするんだよ。」という考え方自体が、人間のすることには何らかの意識的な意味があるということを前提にしています。先ほど学生が「説明してください。」と言った時に、私が怒るといふか、嫌がるという話をしましたが、そこです。人間の行為が、全て意識的に説明できるのが都会です。まわりに置いてある物、例えばこの机を見てください。ここに机があって、白い布があって、ここにタオルが置いてあって、タオルを置く受け皿があります。これは全部意味があって置いてあります。ですから、そういう世界に住んでいれば、物事は全て意識的に意味があると考えようになります。しかし、そうではない世界があることを思い出してください。たまには海に行って、ただ波を見ていてください。5分見ても、何の意味もありませんが、それが実在しているということがだんだん分かってきます。諸君の体がそうです。自分の体を見ると、不気味になってくるのは、実はそのことなのです。

先ほど死体が不気味だと言いましたけれども、死体と同じようなものが、我々の都会生活の中に忽然として現れてくることがあります。例えば部屋に出てくるゴキブリです。この部屋にゴキブリが出てくると、たぶん誰かが走って行って踏み潰す。あんな小さな、か弱い虫に対して、大の大人がなんでそんな反応をしなければいけないのかと不思議に思ったことはないでしょうか。ゴキブリが出てくると、なぜいけないのか。当然のことですがゴキブリは設計した人がいない。皆さんが今、座っているこの空間は、そもそも誰か設計者の頭の中にあったわけです。建物はひとりで出来たのではなくて、誰かが設計図を引いて作ったものですから、今座っておられるところは、設計者が設計図の中に書き込んだ空間であって、それを書き込む前は脳の中にあったわけです。その後インテリアを担当する人が机を設計して入れているわけです。ですから、皆さんが座っているところは脳の中です。脳の中に座っているというだけのことであって、そういう世界がなぜ好まれるかということ、それは大変安心だからです。正体が不明でない。そこにゴキブリが出てきた瞬間に、現代人は錯乱いたします。要するに根本にあるのは「あれは設計図に入っていない。」ということです。今度ゴキブリが出てきたら、じーっとよく見てください。全く人間的意味を持たないものの一つであります。あれを見ていて一番困るのは、次に何をするか分からないということです。歩くつもりか、飛ぶつもりか、それが分かりません。どっちへ行くか、それも分からない。さらにじっと見ていると、あの形が非常に不思議に見えてきます。もう1センチ厚いと、カブト虫みたいにデパートで売れるかもしれませんが、なぜあんなに平らなのか分からない。さらに見ていると、ヒゲが長いんですが、なぜあんなにヒゲが長くなければいけないか。そういうことが一切分かりませんから、そういうものを見ると現代の人は錯乱いたします。そういう世界に慣れていないからです。ですから、ゴキブリは不気味だと嫌われます。ですけれども「それは皆さん自身が抱えているものですよ。それをできるだけ見ないようにしているのが現代社会

でしょう。」と申しあげました。ですから、せめて海の波ぐらいから始めてください。柿の木でもいいのです。私は、よく庭の柿の木の枝を見ていますけれども、あの枝がどういうふうに張っていようが、別に意味はありません。人間的な意味はありませんが、そういうものが世の中にあることも確かであるということです。

都会の人が、いかにそういうものを現実と見なくなってしまったかをお話ししておきます。人間は自分が住んでいる環境から自然に「現実」というものを決めていくものだと思います。一方に、ちょっと特殊な人たちもいますが、何かを「現実」だと決めるのは、皆さんの脳の働きです。親とケンカしたことはないでしょうか。例えば、皆さんの年齢で「結婚したい。」というのと、親は「どうやって食っていくつもりだ。」と言うでしょう。「コンビニエンス・ストアなどで適当にアルバイトをしていれば、そのくらいの金は稼げる。」と答えれば、親は「だから、おまえの考え方は現実的じゃない。」と言うかもしれません。その時の「現実」とは何かと考えたことはありますでしょうか。我々の脳は何かを現実と決めてしまいます。私が言いたいのはそういうことで、都市に住んでおりますと、都市が「現実」になります。その都市は、人間が頭で考えて意識的に作ったものですから、意識的に作った世界こそが現実だと考えるようになります。そうすると、物事はある方向にどんどん動いていきます。

それが戦後の日本が怒涛のように動いてきた方向であり、日本全土の都市化であります。最近の若い人は自然環境などに非常に敏感です。私は北里大学で口頭試験をしておりますが、よく「環境保護の仕事に就きたい。」という話が出ます。しかし自然の中には人間の死体が含まれているということは、あまり考えていないようです。つまり、自然にはプラスの面とマイナスの面があるということです。人間関係も全く同じで、プラスの面とマイナスの面があります。その四つ、「自然のプラス面」と「自然のマイナス面」、「人間関係のプラス面」と「人間関係のマイナス面」が揃って、世界が出来ているのですけれども、都会の人の世界は、恐らく人間関係のプラスとマイナスだけで出来ているといっても過言ではありません。そういう世界に入りたければ - 入っていくのは結構ですが - 何か考えることがあった時には、全く関係のないものを見て欲しいと思います。それは路傍の石でもいいし、波でもいいです。

日本では昔から『花鳥風月』といいます。花、鳥、風、月。これは芸術の題材ですが、これは全て、本来人間の生活と関係のないものです。すなわちそれは「自然」でございます。今の人は、その自然がどうやら現実でなくなってしまうました。例えば、バブルの頃、東京の人を車に乗せて千葉県や埼玉県へでもドライブに連れていく。その辺りには、たまに雑木林が残っている。それを見た時にどういう反応をするかで分かるわけです。「あっ、あそこに空き地がある。」と考える人は、そこに「マンションを建てたら何棟建つか。1棟毎にいくら家賃を取ったら、どれだけ儲かるか。」という計算をいたします。私はそういう考え方を「自然」が「現実でない」といいます。なぜなら雑木林を見た時に、そこに「空き地」があるというふうに見るからです。ということは、

そこに生えている木は見えていないわけで、その木にたかっている虫は当然いないことになっておりまして、それを食って生きている鳥はさらにいないわけです。

自然がなくなるということは、外の世界から自然が消えたわけではなくて、諸君の頭の中から自然がなくなったのが始まりであります。頭の中から自然がなくなる典型的な例は、個人でいえば、皆さんの体がなくなっていくということです。例えばそれは自分の体の要求が分からなくなるということで、医者の世界におりますと実際にそういう若い人が非常に増えているのが分かります。その一方の典型が『過食』であり、もう一方が『拒食』です。

過食は、自分が満腹だというのがもう分からなくなっている。体は、満腹になればもう食べないというふうにセットされたシステムを持っているのですが、そのフィードバックが壊れておりますから、どこで満腹しているのか分からなくて、無限に食べ続けることになります。拒食は全く逆で、空腹だったら食べるという行動が発動するはずですが、それが全然出てきません。拒食は、人間の意識、すなわち頭で考えたことが現実の世界であると、ずーっと子供の頃から思って育ってきた人が、自分の体を発見した時に起こす反応ではないか、と私は思っています。ある日突然、自分の体は、自分が考えて作ったものじゃない、意識ではどうにもならないということに気がつきます。つまり自分の思い通りにならないということに気がつきます。特に女性に多いのです。女性には月経があります。そして妊娠があって、そのあと出産が続く。そういうことは、自分がそのつもりでやっていることではないわけですから、それに気がついた瞬間に「嫌だ。」と否定する人が出てきます。「そういうことをする体には餌をやらない。」という考え方があります。それはある意味で、全くの意識中心主義です。恐らく諸君がこれから入っていく世界は、そういう考え方が非常に強くなった世界だと思っています。

では正解はどこにあるか。私は二つの世界の間にあると思います。私が「都市社会はこういうものですよ。」と説明すると、今の人はすぐに「それじゃあ都市をやめればいいのか。」と言う。そうではありません。その考え方自体が現代社会なのです。

手入れをする

伝統的に日本人はどうやって暮らしてきたかということを最後に申し上げたいと思います。今、都市社会といい、一方で脳といいましたけれども、個人の中ではそれを「心」といっているわけです。「心」といい、「人工」といい、「都市」といい、「規則」といい、全て一方向で同じもの、「意識が作っているもの」です。もう一方に、「体」があり、「自然」があります。これは「意識が作らなかったもの」です。その両者の折り合いをどうするかというのは、女の人の日常を見ているとよく分かります。

余談ですが、哺乳類には男は要りません。要らないというのはおかしいのですけれども、どうでも良いのです。基本的には男は付録です。哺乳類は放って

おけば女になるということは分かっています。つまりY染色体が発生の過程で突然働き出す。働き出した瞬間に、本来女性と全く同じであった、つまり哺乳類共通の構造であったものが変化していった、諸君が睾丸と呼んでいるものになる。それが男性ホルモンを作り出して、男が出来てくるわけです。それはY染色体によるものです。女性はX染色体を2本持っていますが、男はXYです。Xは男女とも持っていて、女性はXだけでいいわけです。ということはYが余計なことをしなければ、哺乳類は全部雌になります。それは人間の基準であり、普遍的なものであります。それに対して男の方は頭の中にどんどん偏っていても別に不思議だと思わないところがありますから、そういう人たちが作ってきた世界が都市社会だと私は思っています。

さて女の人の日常を考えてみますと、まず第1にお化粧をしています。鏡と睨めっこをして、何がいいんだか分からないけれども、1時間でも化粧している。「あれは何なのだろう。」と考えたことがあるでしょうか。

顔は自分で作ったわけではありません。自分で作ったわけではないから、鏡を見るといろいろと気に入らないところもあります。それで「手入れ」をいたします。放っておくと「自然そのまま」になります。自然そのままというのは、屋久島の原生林とか、世界遺産の白神山地などがありますが、あれは放っておいた自然です。つまり勝手にそうなっているわけです。女性の顔もそうなってしまいますから、毎日毎日、手入れをいたしまして、人工の方へ戻す。行き着く先は不明です。行き先不明だから、毎日やっています。さらに自然が気に入らない人、もっと気が短くて、先が見えなければ気が済まない人は美容整形をします。美容整形なら完全な人工です。これを外側の世界でいえば、有明であり、天王洲であり、幕張であり、新宿であります。そういう世界にするか、あるいは反対側の放っておくかということです。手入れをして、どこかに戻す。真ん中のところを取るとというのが私どもの伝統的なやり方だったと思います。

諸君は「手入れ」という言葉を聞いた時に、警察の手入れを思い出したのではないかと思います。これは非常に含蓄のある言葉です。現代社会では手入れといえ、もう警察の手入れしか考えられない社会になってしまいました。本来の意味はそうではありません。白神山地や屋久島の自然に「手入れ」をして我々が作ってきた世界が、田圃里山(たんぼさとやま)であります。田圃里山の風景を君らが見たことがあるかどうかは知りません。そういうところで育った人もいるかもしれないし、全然見たことがない人もいるかもしれません。今度、機会があったら見てください。一番分かりやすいのは、成田空港の上を飛んだときに見られます。あの風景は世界のどこにもない風景です。一方で人工の手が入っていることがはっきり分かりますが、他方で人工が入っているのだから、そこには規則があるはずだと思って、その規則を考えると全く分からなくなります。いわゆる典型的な『複雑系』であります。世界の多くの景色がそうではありません。人工の土地は、極めて見事に「人工」であります。人工であるというのは直線の道路が引かれて、人間がきれいにしつらえているという

うようにしようと考えても「自分の告別式だけは手帳に書いてありませんよ。」と私は申し上げております。

そこが、現代社会の生き方の1番難しいところでございます。私は若い方に「どうしろ、こうしろ。」とは言いません。しかしよく考えていただきたいのは、現実は何かということです。そして世界とは何か。今、私が考えられる限りでは、そこには二つあると申し上げました。一つは人間が作った世界で、もう一つは人間が作らなかった世界です。現代社会は、人間が作った世界が非常に優先している世界です。

最終的な結論は、私は人間の作ったものは基本的に信用いたしません。それは育ちに関係があります。私は小学校2年で戦争が終わりました。それは日本では終戦と言っていますが敗戦と言ってもよろしい。そして、それまでの価値観がガラッと変わるということを子供の時に経験しております。そのくらい人間の作ったものは儚いものだと思っています。それがなぜ、丈夫になり得るか。先ほど「手入れ」と申しました。自然と人間が協力してちょうどいいところが見つかるんですが、それは初めから見つけようと思っても見付かるものではないということです。ですから、毎日毎日手入れをいたします。それが女性のお化粧であり、子育てであり、田圃里山の成立だったのであります。都会はそれとは違う原則でできています。「ああすれば、こうなる」で出来ているのです。そこをよくお考えください。自分の一生が「ああすれば、こうなる」でいくものか、それともそうでなくて「手入れ」でいくものか。そこをお考えください、ということなのです。

どうもご静聴ありがとうございました。